緑爽会会報 No. 176

2021年10月25日発行 日本山岳会 緑爽会 発行人 富澤克禮



デザイン・制作 関塚貞亨

 $\sim\sim$ 《報告》 \sim

10月山行報告

「日野春アルプ美術館での中村好至惠さんの個展鑑賞と ロッジ山旅に宿泊してのハイキング」

富澤 克禮

実施日:10月11日(月)~12日(火) 参加者:9名(後掲写真参照)

緊急事態宣言が解除され、好天に恵まれた11日、昨年11月以来約1年振りに、会の正式行事が開催された。午後1時、日野春駅に集合し、ロッジ山旅の長沢さんの車で中村好至惠さんの個展会場の日野春アルプ美術館に向かう。館長の鈴木さんのお話に耳を傾けながら、力作揃いの絵画を鑑賞、しばし歓談。天気が良いので飯盛山登山口の平沢峠で山岳展望を楽しむおまけが付いた1日だった。夕食後は、ロッジの談話室で楽しく懇談でき、コロナの事を忘れる一時だった。

翌12日は、予報どおり小雨の1日となった。山行の予定を変更、長沢さんの臨機応変の判断で、雨を避けながらの行動となった。幸い霧ヶ峰の八島湿原では雨が降った形跡もなく、短時間ではあるが、静かな草紅葉の湿原を散策することが出来たのは良かった。帰路、諏訪の御柱祭のテレビ中継で放映される木落し坂を見学。ここの草の上での昼食後、小渕沢駅に向かい解散。小海線で帰る高辻さん、平野さんと別れた。楽しく有意義な2日間だった。今後の緑爽会の行事が予定どおり開催されることを祈りながら帰路についた。



八島湿原にて(左から)荒井正人、松本恒廣、平野紀子、田井具世 高辻謙輔、島田稔、渡部温子、渡邊貞信、富澤克禮

10月山行に参加して

髙辻 謙輔

私が日野春アルプ美術館で中村好至惠さんの個展を鑑賞し、ロッジ山旅に泊まるという計画に参加しようと思った動機はふたつある。

ひとつは、日ごろ白山書房の「山の本」で親しんでいる中村さんの小さな挿絵、あのような机辺を飾るにふさわしい小さな絵があったら買うこと。もうひとつはロッジ山旅にあるという2002年に亡くなった望月達夫氏の70冊ほどのアルバムと、2005年12月に文京区本郷の森井書店が出した「森井書店古書目録 山岳書特集号」を見せていただくことだった。

小さな絵は見つかった。ススキ原という、額装された小さな絵で、これは帰宅後さっそく本棚に 飾った。

ロッジ山旅にあるアルバムというのは、横山厚夫氏によると古書市を通して古書店に出たアルバム100冊ほどのうち、深田久弥さんの写真が貼ってある30冊だけが売れた、その残りだという。 写真は1枚ごとに丁寧に説明が付され、何と頁ごとに間紙がはさみ込まれていて、氏の几帳面さがうかがわれた。

古書目録は山岳書の特集で、望月氏あての書簡や献呈署名入り旧蔵書が沢山載っている。望月氏あての「深田久弥書簡・葉書一括」が945,000円という写真入りの頁が目を引いた。思いがけず、長沢さんはこの古書目録を私にプレゼントしてくれた。持栗沢山登山は取りやめたが、長沢さんの案内による山岳展望めぐりは楽しく、有意義な2日間だった。

久々の遠出

平野 紀子

中村さんのお蔭で、3年ぶりに「日野春アルプ美術館」&「ロッジ山旅」へ行って来ました。 甲府を過ぎると、車窓から、ぐるり山々が見え、それだけでもワクワク。マッチ箱の様な小さな 駅に着くと、お元気な参加者のお顔の中、ロッジ山旅の長沢さんのアロハ姿のお迎え。美術館に着 くと、鈴木館長さんの、晴れ晴れしいお迎え。一同ドンドン目的の中村さんの展示会場へ。私は札

幌の高校の後輩の館長さんと即「札幌弁」でアレコレ夢中でおしゃべり。以前の時は、坂本直行さんの部屋以外は、足の踏み場のない程、資料の山々だったのが、ビックリ、スッキリ。何もない広いフロアに、真黒の大きなワンちゃんが囲いの中で伸びていました。横の本のある部屋は見事な整理整頓。"美しい"という表現がピッタリの本棚群でした。館長さんの一冊一冊の本に対する愛情が溢れていました。

やがて展示場に行くと、ナント! 山渓元編集長、神長さんと、ブックデザイナー小泉弘さんがいらしていて、本当に又々ビックリ (何故なら数日前 NHK の「山カフェ」でお声を聴いて、うれしくなってお便りを出したばかりでしたので)。

お二人は記念写真を撮ってお帰りに。



鈴木館長、神長さん、小泉さんと

早速作品群を拝見。懐かしい堂々の「塩見岳」、 雪の「美瑛の丘」。それ以外のどの作品も、自分も その場に立っている様な臨場感がありました。中村 さんの山への愛と喜び・・・次回はどこの会場でみ られるのでしょう。この後、あまりに天気が良く、 八ヶ岳を眺めに野辺山、そこから清泉寮(目的はソ フトクリーム)へと回っていただきました。



清泉寮からの富士山

「山旅」では美幸さんのおいしい手料理をたっぷりいただき、後は談話室で楽しい「おしゃべり 会」(なんだったのかなー、大いに大笑いの連続)。

翌朝、雨模様で計画を変更。白樺湖(目的はコーヒー)から足を伸ばして、霧ケ峰 "八島" を見下ろし、草紅葉を堪能。更に諏訪の7年に1回の大イベント「御柱」の山の麓の草地でお昼(各自持参)。後は一路小淵沢駅へ。長沢さんの名ガイド、本当にありがとうございました。最高の山旅を計画して準備くださった代表はじめ幹事の皆さんに感謝です。

旧友と鷦鷯と

島田 稔

快晴の10月11日、日野春駅になつかしい顔が揃い、長沢さんと落合う。早速マイクロでアルプ美術館へ。中村好至惠さんの素晴らしい個展を鑑賞。3年毎に20年近く展示をされてきた由。 賑やかな鈴木館長の話もあって楽しい一時であった。

奇麗な青空のもと長沢さんのガイドで展望台では八ヶ岳、 清泉寮で南アルプスの素晴らしい展望を十分に堪能。清泉寮 ではかなりの人出もあり、有名なソフトクリームを味わうこ ともできた。 →平沢峠からの八ヶ岳(赤岳・横岳)

ロッジ「山旅」は何年ぶりであろうか。本当になつかしい。



食後の団欒の際、平野さんから漢方の「芍薬甘草湯」の話があり、その効用と入手方法について 大いに盛り上がり賑やかだった。

翌日は朝から雨もよいながら長沢さんに案内していただく。八島ヶ原湿原は大小の浮島があって 七島八島とも呼ばれ、晴天の草紅葉のすばらしさを想像させる。有名な諏訪大社御柱祭のウラジロ モミの大木を引き降すのが「木落し坂」である。30度はあろうかと思われる傾斜で、その勇壮さ が目に浮かぶ。(編者注:八島ヶ原湿原とは一般的に言われる八島湿原のことです)

午後1時頃小淵沢駅到着。2日間大変お世話になった長沢さんと別れ、帰途についた。 ※追記。川端康成は「禽獣」の中で、「菊 戴 は、日雀、小雀、みそさざい、小瑠璃、柄長など共に最も小柄な飼鳥である。」と書くが、「みそさざい」だけがひらがなであるのが面白い。

続・良き隣人

芳賀 孝郎

前号で、良き隣人の肥田野豊氏を紹介した。この偶然の出会いが、私たちの生活に幸福をもたら してくれる。感謝感激である。

私の家に裏門があり、その庭への路は大きな石を取り除いた自然のもので、歩くには不安定な路であった。それを見た隣人は、石を取り除き、土地の高低差を測り、高さ15cmの階段を7段作製してくれた。階段には杭をうち、それに板を張り、また次の階段を同じ工程で作り、段と段との間には砂利石を入れて固めていき出来上がった。

この階段は狭い。両側に掘り出した石を積み上げた。木の部分は防腐剤を塗って仕上がった。庭への小路は自然とマッチし素晴らしい。 一冬が過ぎ、重い雪の下にあった階段はどのようになったかを心配していたが大丈夫であった。

隣人は弘前大学教育学部の先生であった。物作りにも造詣が深い、 自分の家には自家製の工作室がある。庭に線路を敷設し、汽車を走ら せる正確さと精密な技術を持ち、道具も揃えている。この小路は難し いものではなかったようだ。

私たちの生活は、86歳で車の運転をやめたので、買い出しはせず 生活クラブ生協に依存している。それで十分ではあるが、肉類と魚類 ・刺身は全て冷凍である。或る時新鮮なお刺身を食べたい気持ちにな ることを肥田野ご夫妻へお話をしたことがあった。すると肥田野ご夫 妻は毎週土曜日、懇意にしている市場へ買い物に行くのでお刺身を買 ってきて下さるとの提案があった。私たち老人夫妻は、親切な行為は 遠慮なくいただく気持ちであったので、その提案に直ちに乗った。

毎週土曜日はお刺身とお惣菜を届けてくれるのである。私はお刺身が来ると、どうしても日本酒を飲みたくなる。コロナ禍で仲間がいないが、女房との一杯は嬉しい。お刺身だけではなくお惣菜も一緒に届くのである。イタリアン風のもの、フランス風のもの、日本風の煮物、赤飯、竹の子ご飯等々が届くのである。土曜日は女房が食事の支度を

しないで済むので大喜びある。肥田野夫人・恵里さんは音楽家であり、料理もお上手である。

前回お知らせの通り我が家では毎朝パン食で、トーストにジャムをつけて食べている。恵里さんキッチン製のリンゴジャム、マーマレードジャム、ブルーベリージャム、ラズベリージャムがいつも我が家の食卓に並んである。ジャムがなくなる頃に届くのでありがたいことであり、いつも感謝して食べている。

私たちは、このような親切な行為に甘えていてもよいのかと自問自答しているこの頃である。

2021年5月記

コロナに関係なく庭の木々は季節通りに花が咲く。6月になると白い小梨の花、黄色の金鎖、白いクレマチス、小さいエゴの木の花、赤と白の野バラ、シャクナゲ、牡丹等が次々に咲く。

5年前、横浜の三田家からもらったヒマラヤンムスクは、昨年良き隣人がバラの支えを作ってくれた。今年はそのお蔭で元気よく成長し、オオテマリ、ミズナラの木にまで伸び、見事な花を咲かせてくれた。それを見た良き隣人は、小路に合わせたアーチを作製してくれた。

良き隣人は黄色のルノーの車に乗り、ホームセンターへ材料を買いに出かけた。私はそれに同行した。4本の柱とその基礎となるコンクリートの土台とアーチの部分の材料、その材料を固定するネジ、金具等は設計図に合わせて買い付けた。土台はレベルを使用して水平にし、柱もレベルを使い垂直に金具を使って固定し、雪にも耐えるアーチを作り上げた。早速ヒマラヤンムスクの枝をアーチに結びつけた。ヒマラヤンムスクは新しいアーチが気に入ったようで、アーチの上で花を咲かせてくれた。それに合わせて更に二段の階段を追加した。これでアーチを通り抜けて、階段の小路を上り、庭へ行けることが出来て大喜びである。

良き隣人は帰る際、裏門の鉄製の扉を開けた。その扉は下の部分が朽ちていた。それを見た隣人はこの際アーチに合わせて扉も新しくすることをすすめてくれた。この提案も直ちに受け入れ、製作をお願いした。

早速鉄製の扉は、グラインダーで切断された。寸法を測り、アーチに合わせた木製の扉を作り上げた。扉の取り付けは、鉄製の扉に取り付け部分を切断して、新しい扉に付けた。門の左右のバランスを取り、金具を取り付けた。これで完成と思いきや、扉が一定の位置に止まるよう止め金をつけて完成した。

門を開いて階段を上り、アーチを通り抜け小路の階段を上って庭に出る。予想していたよりはるかに素敵である。自然に調和している。

良き隣人へ、感謝とお礼を申し上げた。その前に完成のお祝いとして一献を差し上げたいと思う。 しかし、コロナ禍の折、残念ながらお預けとしたい。

私の仕事は完成されたアーチの横にギボウシを左右に植えること、階段の小路の横にもギボウシ を植えて、日陰に強いギボウシの小路にしたい。

私の庭には小鳥の餌台がある。この餌台は私が2011年に札幌へ帰ってきた時に、日本山岳会 北海道支部・元支部長の長谷川雄助氏が記念に作ってくれたものである。



この小鳥の餌台は、冬の間、毎日シジュウガラ、ゴジュウガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シメ、ヒヨドリ、時にはアカゲラもやって来る。餌台のひまわりの種に向かってホバリングしてくる姿が面白い。餌台に餌があるのを見たリスがやって来て小鳥たちをおい払って餌台を独占する。その鳥たちとリスの行動を眺めていると面白く、飽きない。

私はその餌台の屋根に2・3年に1回ペンキを塗っていたが、メンテナンスが悪く、屋根が壊れてきた。この度、その屋根も良き隣人に修理をしてもらった。屋根の勾配を測り、丈夫で且つきれいな屋根に復元された。私は、今年の冬も小鳥とリスたちと遊べることが楽しみである。

老人になり、車も無くなり、体力も無くなり、自分の力だけで生きているのではないと知る。目に見えない大きな力で生かされているのだ。私たちは幸いにも、良き隣人とめぐり合い、生きていることに感謝している。 2021年7月記

編集者余話〈その4〉

南川 金一

総頁数約 800 頁の『日本山岳会百年史』が出来上がったのは 2007 年 3 月だった。しかし、思わぬ形でミスはあるものである。本が出来た後に、正誤表を作るように、委員長の松田さんからの指示があった。正誤表を作るからには、手分けをして、すべてにわたって読み直してミスを探さなければならない。しかし、私が読み直しをしてもミスは見つからない。校正というのは、向き・不向き、慣れ・不慣れがあって、誰でもがやれるものではないし、ただ読めばよいというものではない。足並みならぬ、"目並み"が揃わないので、正誤表を作ることができないままに過ぎてしまったのには忸怩たるものがある。

百年史を牽引した松田さんは3年ほど前に亡くなった。松田さんは、会を知っていることにおい て右に出る人はいなく、御意見番だった。会への滅私奉公ぶりは凄まじく、その原点は会からマナ スルやエベレストへ行かせてもらったことへのお礼奉公だった。この上ない名誉であり、青春を燃 焼させることができたのであるから、それはそれでよいのだが、私のような者にまで滅私奉公を押 し付けるようなところがあった。調べ事に熱中して朝になる、ヒマラヤンクラブの用件で深夜まで メールのやりとり、百年史メンバーへの電話での督励と、超多忙を楽しんでいるような人だった。 毎朝といってよいほど、8時頃になると電話があり、松田さんからだった。用件があるときもあり、 何が用件なのかはっきりしないままに 30 分以上も電話を切らないこともあった。午後から山岳会 へ行って渡部さんに会うと、「今朝松田さんから電話が…」と。気になることがあると、すぐに電 話で話をしないと気が済まないようだった。前述のように、私が『山岳』の編集を担当するように なったときに、最も頼りとした相談相手は松田さんだったし、いつも相談に乗ってくれて適切な示 唆をもらうことができたのは百年史においても同じだったから、私には尊敬すべき大先輩だったが、 毎朝のように長電話となると、ついついぞんざいな口を利いてしまった。百年史が終わった数年後、 「松田さんが認知症で…」という話に驚いた。百年史の最終段階で集中力が続かないように見えた のは、その初期症状だったようだ。認知症というのは「明日はわが身」と覚悟しておかなければな らない。いろいろなケースがあって、その現れ方も多様らしい。電話をかけて話をしたいというの も、自己表現のひとつだったのだろうか。『日本山岳会百年史』の「会員 百年の推移―会員数・会 員制度・会員番号など―」は、会に精通した松田さんならではの、精魂を傾けた力作だった。

理事会では平山会長が百年史と『山岳』を担当していたので、百年史が終わったのを機に『山岳』の編集も退任したいと申し出た。『日本山岳会百年史』ができ上がり、会員への配布、関係方面への発送をも終えた4月の下旬、北アルプス最北端の横前倉山へ行った。その紀行文は拙著『続 山頂渉猟』に載せた。横前倉山が最初に載っているのは、本の性格上、北アルプスを最初に置きたかったし、その北端が横前倉山だったからである。その末尾に「私にとっては、この山は解放感に満たされるものだった。……もう印刷屋に指示する用件もないし、毎日のように掛かってきていた編集仲間からの電話の懸念もないから、嵐により停滞していても気掛かりなことは何もなかった。精神的な荷物を背負わない山登りが何と気が軽いものかを、久々に実感した」と書いた。

会報の誤植で「腹を切れ」

私が『山岳』を担当して理事会に出ていた時の会報編集担当は小倉厚氏(1929~2006)だった。 理事会の席で、小倉さんは会長の正面に座って、脇目もふらずに原稿を書いていた。後で、「何を 書いているのですか」ときくと、会報のための原稿をリライトしているという。そのころの会報は、まだ活版印刷の時代で、9 ポ 17 字×31 行×4 段組みだったので、会員から来た手書きの原稿を 17 字に清書して割付けていたのである。小倉さんにとって、会報の編集はこの時が初めてではなかった。その前は 1973(昭和 48)年だった。同年9 月号の奥付の前に「〔後書〕春田理事多忙のため会報が大変遅れました。小生またピンチヒッターになりました。(山崎)」という記事がある。奥付には「11 月 10 日発行」とあるから、2 か月くらい遅れたようだ。すなわち、会報担当理事春田俊郎氏が多忙なので山崎安治氏が代行するというのである。山崎安治氏は 1955(昭和 30)年 9 月号~1960 年 6 月号と 1968(昭和 43)6 月号~1972 年 5 月号の会報編集に携わっていたから、「また」だったのである。しかし、3 回目の編集の実務は小倉さんに任せられた。そのころの会報は 8 ポ 17 字×43 行×5 段組みで、細かい活字がびっしりと詰まっていた。小倉さんは持ち前の几帳面な性格もあって、原稿を 17 字にリライトして、きれいな原稿と、1 行の狂いもない正確な割付けとを印刷屋に渡した。原稿が組むべき字数でリライトしてあると、活字を拾う能率が上がるばかりでなく、結果として誤植や間違いが少なくなる。印刷屋の職人も、そのようなきちんとした編集者には意気に感じて仕事をしてくれた時代だった。

しかし、誤植はあるもので、会報 No.350 (1974年8月号) に「訂正とお詫び」記事が載った(下の図版)。いまでは、この件の顛末について知っている会員はほとんどいないだろう。私はまだ入会前のことである。博覧強記の人・関塚さんによれば、原稿の執筆者が小倉さんの家に電話をして、電話に出た奥さんに向かって「腹を切れ」と怒鳴りつけたというのである。この場合、編集責任者

は山崎安治氏である。まずは山崎氏に苦情を言うべきところ、山崎氏は一目を置く存在だったので、小倉さんに電話をしたのである。それにしても、皇室かかわりだというので頭に血がのぼってしまって、前後の見境もなくなるというのは困ったものである。誤植は、ないに越したことはないが、そもそも、人間のやる仕事に 100 弥完全などということはないのである。誤植を気にしていては、編集者はノイローゼになってしまう。とはいえ、開き直るわけにいかないのが、編集者のつらいところである。

山岳会は創立以来今日まで、会員の勤労奉仕によって成り立ってきた。それは誇るべき伝統なのだが、『山岳』と会報の編

下では、 一丁正とお詫び 本誌三四八号 本誌三四八号 での件につき宮家はじめ筆者の成類 との件につき宮家はじめ筆者の成類 との件につき宮家はじめ筆者の成類 との件につき宮家はじめ筆者の成類 との件につき宮家はじめ筆者の成類 として深くお詫び申し上げるとともに、早速、関係各位 はを致しましたことをご報告申し上げるとともに、早速、関係各位 しを致しましたことをご報告申し上げるとともに、早速、関係各位 しを致しましたことをご報告申し上げるとす。 (編者・小倉記)

集は勤労奉仕の限界を超えるものがある。とりわけ、活版時代の会報編集はそうだった。編集者への協力は、「あの記事はよかったねえ」の一言があればねぎらいになるし、何よりもバリューのある原稿を書くことだと思う。

小倉さんの労作に、会報の索引(目録)がある。50 号ごとに編集された会報の索引は、以前の会報の掲載記事を調べるにあたり便利であると同時に、それを拡げると、索引編集者の苦労とともに会報本体の編集者の苦労が偲ばれる。小倉さんは会報 No.301 から No.700 までの索引を作成した。1970(昭和 45)年7月号から 2003(平成 15)年9月号までである。引き続き 701 号以降も整理していたが、会報編集者に小倉さんから「目録作成は 733 号まで進んでいるが、末期性のガンがみつかって、もうできません」との電話があった、と 701 号~750 号目録の編集後記にある。パソコンのない時代であり、手作業である。これも、せめて「お陰で会報の記事を探すのに重宝しているよ」との一言があれば、編集者の苦労は報われるのである。

図書紹介

相楽 泰子

緑爽会に入会する前でしたが、会報 162 号で、近藤緑さんに夫の書いた本を、図書紹介として書いていただきました。「香料商が語る東西香り秘話」です。主人は昨年亡くなりましたが、病床にあっても書き続けていたものが、この夏に出版の運びとなりました。娘の順子が出版に協力してきましたので、父の想い出も交えて紹介文を書いてもらいました。

香り研究家、今はどこを旅していますか

~相良嘉美『燦々と香るナイルにあの世でも』中央公論事業出版刊に寄せて

斎藤 順子

昨年9月に逝った父・相良嘉美の著書がこの夏、やっと出版されました。2020年春の予定がコロナ禍などで遅れに遅れ、待ちきれずに父が旅立ってから1年を経ての出版です。

父は香料会社に 47 年間勤務しました。前半は貿易部のモーレツ営業マンでした。後半、教育部長や広報室長を務めた時期に、「外部の専門家を呼んで講演してもらうだけでは社員教育にならない。自分が講義できるほどの専門家になろう」と決め、香りと名の付くものを手あたり次第に学びました。2010年の退社後にサガラロームという会社を設立、香り文化研究家として『香りを旅する』『故郷、緑なれ』『香料商が語る東西香り秘話』の3冊を上梓しました。サガラローム(SAGA 1`arome)という社名は、相良と香り(アロマ)をかけあわせた、父のお気に入りの造語です。

2015年出版の『香料商が語る…』は、近藤緑様がこの会報で取り上げ、著者よりずっと分かりやすい言葉でまとめてくださいました。父は当時、香水の古都グラースに夢中でした。国際会議をきっかけに世界的な調香師の知遇を得て、香水の名所を歩き、本にまとめました。一方、その取材経過で「香料の原点はヨーロッパではない。エジプトだ」と確信したのです。それが本書『燦々と香るナイルにあの世でも』になりました。

「鍵はモーセの出エジプトにある。モーセはエジプトの宮廷で働いていたから、エジプトの香料技術を知っていた。モーセが持ち出した技術がキリスト教の聖香油を生み、欧州に香水文化が栄えた。僕たちは世界史を学ぶ時にどうしても欧米の視点に立ってしまうけれど、香料の起源を追えば、歴史の真実が見える」

そう伝えたい熱意はあるものの、病床の歯がゆさと最晩年の頑固オヤジぶりも手伝って、本書は 脱線と休憩を繰り返しつつ、説明も長め。前3作に比べると読みづらい1冊です。

第1章 オシリスとイシスの神話から始まる。殺されたオシリスの復活を信じ、妻イシスは遺体を 守り抜く。遺体を覆う白布に香油を浸み込ませて。守護神にはハゲワシやオオカミ。なぜ 死肉を喰う彼らが神なのか。肉を失った遺骸が腐らないのを見て、人々は彼らを遺体を清 める神としたのだ。ミイラと香油が生まれた背景が分かる。やがて香りは女性の装いに使 われるようになり……。クレオパトラまでの古王朝を語る。

- 第2章 ナイル川を下り、産物を観察する。多種の豆、ゴマ好きの日本人の 450 倍も消費されるゴマ類。王たちの壁画にはパン焼きやビール作りの工程。モーセが約束の地とした「オリーブの木と蜜のある土地」の蜜はナツメヤシだった。ナイルは香る食材の宝庫である。
- 第3章 新王国時代。映画『十戒』ではラムセス2世の兄弟として育ったモーセは、『出エジプト記』では神に啓示されたという香油の調合法を語っている。著者自身の体験記も満載。P 202に1998年のエジプト初訪問を描いている。「一つでも多くの墓を観て、撮影しようと作業着姿で砂漠の中を転げ回るように興奮して回った。当時は多くの墓が内部の撮影を許していた」。その父のネガが得がたい宝だったと遺族が痛感したのは、P198「カーの捧げもの 副葬品の箱の絵」の写真。色々な形のパン、ワイン壺、牛乳、フクロウの肉、魚の干物、サラダ、ナツメヤシ、レーズン、クミンなど香辛料……古代エジプト人の食卓を生き生きと描いた絵である。ネガを出版社に提出したはずだが、著者死亡後の三校で「ありません」と伝えられた。ネガを探しつつ、他の研究者にも資料提供を願い、しかし絵を所蔵するトリノの博物館と日本の出版代理店との間に契約がなく、掲載が叶わなかったことが悔まれる。
- 第4章 ツタンカーメンは病弱で杖をつく人物だったのか。黄金のマスクは彼自身なのか。
- 第5章 いまだ見つからぬネフェルティティの墓。第4~5章は、香料をやや離れ、著者の大好きなアマルナ美術を眺めながら、王や王妃の姿を自由に想像する。



「香りを知れば 歴史の真実が分かる」 と帯に記した



ネガが見当たらず掲載できなかった絵。 1998年の現地では自由に撮影できたが 今はトリノエジプト博物館の収蔵品だ

香りと、旅(取材)と、原稿。父の人生はこの3つでした。でもエジプトを訪れたのは2度きりです。1998年は会社の広報誌の取材。退職後の2012年は夫婦での旅行。たった2度でも父にとっては終着点だったのでしょう。病床で「夢は枯野をかけ巡る」と遠くを見ていた、その先は砂だらけのエジプトだったに違いない。本の装丁には夫婦で見ただろうピラミッドの色を選びました。

ミイラにはしてあげられませんでしたが、父が世界各地で集めた乳香や没薬をお棺に入れましたから、王様気分を味わえたでしょうか。この本を手にした時、「たった1年で復活できたんだね」と感じました。

いえ、「これは僕の最後の本だ」と言っていたわりには、最終章でインドに色気を示していますね。まだまだ、旅の続きでしょうか。

大森安恵著『糖尿病と向き合う一筋の道』

近藤 緑

淡いピンクに桜の花びらを散らしたカバー、帯には白衣を着た著者の優しい笑顔が読者の心に呼びかける。糖尿病治療では世界的な権威とは思えない親しみやすい雰囲気である。飽食の時代、文明病とも言われる糖尿病に悩む人は多いと思う。かく言う私も、血糖値が高めだった為に糖尿病予備群とされ、生命保険の掛け金が法外だった経験を持つ。これまで無事に来られたのは、ひとえに安恵先生の適切なアドバイスのお蔭である。

先生は私と同世代で、母校東京女子医大教授はじめ、各地の糖尿病センター長などを務めたあと引退されたが、彼女の最大の功績は「糖尿病と妊娠」の関係を究めて、糖尿病患者の妊娠を可能にしたこと。悩める女性にとっては神様とも言える存在なのである。



医療現場から離れても、論文の発表やシンポジウムなど、国際的な舞台ではまだ現役。この度の出版のご挨拶にも「いつ死んでもおかしくない年齢になり」と言いながら「来年はギリシャ・テッサロニキの『糖尿病と妊娠の国際シンポジウム』に参加しようかしら」とも書いてある。この超人的な先生となぜ親しくなったかと言えば、彼女の夫君がアルプスの先駆者・近藤等教授の一番弟子、山岳史家で編集者の大森久雄氏だからである。二人は学生時代から交際していた。「四国の無医村に病院を」との願いから、娘を戦後間もない東京に送り出した安恵さんの父親は、医者でない早大生との結婚に猛反対。その時久雄氏は一言、「貧乏でも心は貴族だ」と反論したとか。深田久弥『日本百名山』を企画、担当した編集者であり、気難しい田淵行男の本も手がけた。近藤信行共々不肖私も彼のお蔭で本を出すことが出来た。夫妻共に恩人なのだが、心の広い安恵さんは「みんなお友達」扱いして下さる。

最初手にした時には難しい医学書かとたじろいだが、楽しく読めるエッセイ集だった。

目次は、1. 患者さんから教えられたこと 2. 尊敬する恩師と同志 3. 私の歩いた一筋の道 4. 彼岸花の鎮魂歌 5. 桜の花に寄せての5章から成って、いる。

1. では、彼女の治療方針に従いながら仕事を続け、天寿を全うした人たちを紹介している。オペラ歌手の岡村喬生、肥満体の小林亜星など、懐かしい人達が登場する。2. は、女性蔑視の時代、敢えて東京女子医大教授となって指導された恩師達のこと。1952年、卒業してインターンを終了、第二内科に入局、学位論文を完成させた直後、思いもかけなかった死産を体験して悲嘆に沈む。この時に妊娠中糖尿病昏睡と死産の二人の患者を任されたことから、「糖尿病と妊娠」について猛勉強を始める。3. では、彼女が夫や二人の子供を日本に遺してカナダのマクギル大学に留学、糖尿病と妊娠の研究に没頭する話から、昨年初めてオンラインによる国際学会に挑戦する迄の長い一筋の道の記録。4. 5. も医学にまつわる挿話から、多彩な教養を感じさせる小話の数々。時にすれ違い夫婦の日常を覗かせて微笑ましい。医師として、人間として、関わった全ての人に感謝し、花も虫も月も身辺のあらゆるものを慈しむこの人を、私はますます好きになった。(時空出版 03-3812-5313 刊)

+ + + + + ◆ + + 《ようこそ、ルームへ》+ + ◆ + + + + +

ノレン氷河

夏原 寿一

名著『たった一人の山』(浦松佐美太郎著)の「山と氷斧」と題した一章に、著者が馴染みにしているグリンデルワルトのガイド、エミールとメンヒのノレン氷河を登ったときのことを書いている。

メンヒのノレンと言えば、クラシカルな氷の登攀として、アルプスの中でも有名なものの一つだ。(中略) エミールが「ノレンピッケル」だと言って、其の朝持って来たものは、恐ろしく大きなものだった。柄は両手で握れる位の極く短いものだが、穂先は長さ1尺、重さは1貫目を越えていたろう。それでいて切尖は、針の様に鋭く、研ぎすまされていた。

朝の6時頃ノレンの氷の上に立った時、此の大きなピッケルは、素晴らしい切れ味を見せ始めた。来る夏も来る夏も融ける事なく、固く凍りついているあの氷の上に、足場を切るには普通のピッケルではどうしても、何逼もうちこまなければならないものを、2度か3度打ち下ろせばもう片足を掛けるに十分な、足場が抉り出されていた。ぴしりぴしり、息もつかずに氷を打ち割ってゆくエミールの腕も冴えていた。

そのノレン氷河が本紙前号の6頁、『メンヒに登った日…1972.8.21』の左側の写真に写っている。 メンヒの頂上から手前に下りている白い部分(懸垂氷河)がそれだ。

蝶を育てる―私の楽しみ

石塚 嘉一

この夏は山に行けず庭で蝶を育てました。

家の小さな庭に、今年もホトトギスが花をびっしり付けた。そこでは、こげ茶色のからだ中にとげをつけたルリタテハの幼虫が何匹も、葉をバリバリと音が聞こえるほどに、一心不乱に食べていて、つぼみまで食べ尽くす。いくつもの鉢では、ツマグロヒョウモンの、これまた茶色のとげとげの幼虫が、エイザンスミレなどの葉を食べ尽くして、茎だけになると、新しいスミレを探して地面をはい回る。

これらの幼虫がみな蛹になって美しい蝶になれるわけではない。餌になる虫を探しにシジュウカラがやってくるし、オオカマキリは、草の間で待ち構えていて、羽化したばかりの蝶を大きな前脚で捕食する。我が家の庭は危険極まりないのだ。

そこで、運よく終齢近くまで育った幼虫をいくつか捕まえて、虫かごなどに入れて、蛹になって羽化するまで天敵から守ってやることにした。毎日、食草を入れ替え、幼虫の様子を覗いて、うまく蛹化し、羽化するまでは気が気ではない。コロナで山にも行けなかった分、この夏は忙しかった。夏も終わりになってから、もう10匹ほどが蝶になって広い空に飛び出して行った。

12月講演会「深田久弥没後50年 その人となりと魅力」

講師:横山厚夫氏(4432)、桜井昭吉氏(5021)

横山氏は深田久弥と多くの書簡のやり取りがあるなど、親交があった方です。

桜井氏は日本百名山の越後駒ヶ岳、平ヶ岳で深田久弥を案内した方です。

日時:12月4日(土)14時~

場所: JR 中央線「武蔵境駅」北口前 スイングホール10階 スカイルーム1

申込:富澤 または

荒井

定員:40名 会報「山」10月号で告知しますので早めのお申し込みが望ましいかと思います。

11月山行: 奥多摩、日原集落散策と鍾乳洞見学ツアー

日時:11月11日(木) 雨天中止

集合:JR「奥多摩駅」改札口に 10時10分

東京駅発8:06中央線快速青梅行き(立川駅発8:57)で

青梅駅乗り換え、奥多摩駅に10:03着です。

行程:10:15発鍾乳洞行バス乗車(1番バス乗り場)10:39東日原下車

日原集落を散策し、途中昼食をとります。のち鍾乳洞と一石山神社を見学し、鍾乳洞を

16:06発のバスで奥多摩駅に戻ります。奥多摩駅発16:52、青梅駅で乗り換え、

立川駅18:04着の予定です。

経費: 奥多摩駅からのバス代 1000円 (行き帰りとも)、鍾乳洞 800円

担当:石井秀典

装備:一般日帰り登山装備(鍾乳洞は11度くらいなので防寒のためヤッケ・帽子必携。また滑ら

ない靴でお越しください)

申込:富澤

なお、12月忘年会ですが、現在ルームは土曜閉室で、これが緩和され、集会室での飲食が出来るようになるかどうか全く不明です。今のところは、残念ながら見送ることと致します。

1月初詣山行「高尾山八十八大師巡り―その2 結願」

八十八大師巡りで回り切れなかった七十六番以降八十七番までを巡り、薬王院で巡拝証を受けます。 最初の計画から初詣山行にスライドし、さらに3月にずれ、それも中止としました。今度こそ実施 したいものです。もちろん、前回参加できなかった方もご参加いただけます。

運が良ければ、氷の花シモバシラが見られるかもしれません。

日時:2022年1月7日(金)

集合: JR 高尾駅北口に9時

行程:高尾駅北口→落合→金毘羅台→1号路→薬王院→高尾山頂→3号路・1号路で下山

ケーブルでの下山もできます。歩行時間:休憩込み約5時間

担当:CL 荒井正人 SL 小林敏博

装備:一般日帰り登山装備(防寒対策を)直前に降雪があった場合、念のため軽アイゼン要。

申込:1月3日(月)までに荒井へ

※当日の天気予報が思わしくない時は実施可否を決定の上、連絡を入れるようにします。

--- 編集後記 ------

俄かには信じがたい感染者数の激減ですが、これに浮かれることなく身についた生活様式を維持していこうと思います。山は少し気楽に行けます。日野春アルプ美術館とロッジ山旅は緑爽会にとって心地よい場所です。そこで皆さんと会うことができて素直に嬉しく思っています。会報への投稿もよろしくお願いいたします。(荒井正人)

10月に入っても夏のような陽気が続いていましたが、ここ数日、朝夕の気温が大きく下がり、初冠雪のニュースがテレビで流れるようになりました。コロナの新規感染者が大きく減ってきた中、登る山、眺める山がようやく身近に感じられます。久しぶりに会の行事も再開され、皆さんとお会いできるのを楽しみにしております。(小林敏博)

<次号予告>12月23日発行の主な内容

10月さがみこべリーガーデン訪問記、編集者余話(最終回)、11月山行報告など皆様からの投稿をお待ちしています。新コーナー「ようこそルームへ」もよろしくお願いいたします。